

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を育む
幼稚園教育のあり方に関する一考察
- 領域「人間関係」との関係に着目して -

A Study on Kindergarten Education Which Centers on Nurturing
“10 Characters Developed by the End of Early Childhood”
Focusing on the Perspective of Human Relationship

谷口 聖・浅井 拓久也

要旨

本研究では、幼稚園で行われた実践の分析を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「人間関係」に関する子どもの育ちにつながる実践のあり方について検討することを目的とした。研究方法として、芸術士と幼稚園教諭による芸術活動に参加する子どもの姿に対して、『幼稚園教育要領』で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）がどのように育まれているか（育もうとしているか）を考察した。分析結果として、芸術活動が『幼稚園教育要領』で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）が達成される有用な教育活動であることが示唆された。

キーワード：幼稚園教育要領、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿、人間関係、参与観察

1. はじめに

2017年（平成29年度）に『幼稚園教育要領』が改定され、2018年（平成30年度）4月より実施されている。この改定は2016年12月の中央教育審議会答申を受けて、幼稚園から高等教育まで一貫した方針のもとになされたのである。

本改訂について、田中他（2018）によれば「この答申では、今の子どもの学力や行動、体力などの現状と子ども達が迎えるこれまで経験したことのない予測不可能な未来社会に対応するために、教育目標や内容、方法の大きな変革を求めている。」¹⁾と述べられている。また、湯地（2019）では「環境を通して行うことなどの基本は変わっていないが、乳幼児期からの「学び」が明確化されたこと、幼小の連携・接続の強化がされたことなどが大きな変更点といえる。」²⁾と述べられている。

幼稚園教育で育てるべき資質・能力として、(1) 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする「知識及び技能の基礎」、(2) 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする「思考力・判断力・表現力等の基礎」、(3) 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力・人間性等」という3つの柱を設定し、幼稚園等でもその基礎を育てるというものである。またそれらの資質・能力の表れる具体的な姿として「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示された。この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は5領域から抽出した、今の時代に大切にしたい項目である。

青山（2018）によると以下のように5領域と対応していると述べられている。

「①健康な心と体—健康

②自立心—人間関係

③協同性—人間関係

④道徳性・規範意識の芽生え—人間関係

⑤社会生活との関わり—人間関係・（環境）

⑥思考力の芽生え—環境

⑦自然との関わり・生命尊重—環境

⑧数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚—環境

⑨言葉による伝え合い—言葉

⑩豊かな感性と表現—表現」³⁾

このように「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と5領域の関係性を見てみると、健康1、

人間関係 4、環境 3、言葉 1、表現 1 という割合になっていることが理解できる。つまり、「人間関係」にもっとも重心が置かれているという解釈ができる。

また、「人間関係」と関わる「自立心」では、「身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。」とあるように、「人間関係」は子どもの社会情動的能力の育成と強く関係がある。

乳幼児期においては、子どもの認知的能力ではなく、社会情動的能力の育成が重要であることは多くの研究で示されてきた(Heckman、2015)。こうした研究を踏まえて、『保育所保育指針解説』にも、「他方、様々な研究成果の蓄積によって、乳幼児期における自尊心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが、大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかになってきた」と示されている。こうした背景を踏まえて、本研究では「人間関係」に着目した。

そこで、本研究では、幼稚園で行われた実践の分析を通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の「人間関係」に関する子どもの育ちにつながる実践のあり方について検討をしていく。

2. 研究方法

本研究の調査対象は、E県N市の私立幼稚園で行われている3歳児、4歳児、5歳児の芸術活動とした。本研究では、子ども同士の人間関係の形成のあり方やそれを促す保育を分析するため、子ども同士が関わりあう活動を取り上げる必要がある。調査対象とした幼稚園では芸術士による保育を定期的実施しており、この活動では複数の子どもが互に関わりあい、考え合い、話し合っ作品をつくっていくという過程が多く含まれている。以上の理由から、調査対象として選定した。

調査方法として、参与観察を実施した。子どもたちの活動に影響を与えないように配慮しながら、筆者の1人が保育に参加して観察を行った。その際、子どもたちの行動をデジタルカメラで撮影し記録した。子どもが芸術活動に参加する姿に対して、『幼稚園教育要領』で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）がどのように目指されているのかを考察した。

もちろん、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は個別的に育まれるものではなく、遊びや生活を通して総合的に育まれていく、そうなるような保育を目指していくことは言うまでもない。本研究で取り上げた子どもの姿からも、「人間関係」だけではなく、他の姿の育みも見られる。

参与観察は、2018年6月15日、2018年6月25日、2019年6月11日、2019年6月25日の4回実施した。

3. 結果と考察

(1.1) 事例1「活動を絵に表してみよう」2018/6/15

事例1は、E県N市の幼稚園4歳児の保育活動の事例である。

前回の保育活動では川に行き自然と触れ合う活動を楽しんだ。川にはどのような生き物がいるのか。その際に発生する自然の音に注目し子どもたちに関心を向けた。

「川でどんな音がありましたか？」と子ども達に問いかける。「川が流れる音がした」「石を投げた時にバシャとなる音がした」「消防車の音がした」などの言葉が返ってくる。「では実際に音を聞いてみましょう。」と声かけがあり、川辺で録音しておいた音を子どもたちと共に聞く。「川の流れる音がする」「風の音がする」などどんな音があったかを振り返る。

子ども達は教室に集まり本日の活動について説明があった。前回の活動を踏まえ、感じたことを絵にするという活動である。

「では、実際に絵を描いてみよう。」と声がか

かり、子ども達は配られた画用紙に絵の具で描き進めていく。①「川の水は青かった。」「お魚もいたよ。」「草花がたくさん咲いていたよ。」と友達と話し合いながら活動を進めている。(写真1)「僕は川の絵を描く。」「私はお花を描く。」など1人1人が感じたことを思い思いに描いていく。また話し合いの中で川の青色を出すためにはどの絵の具を混ぜればよいか、お花赤色を出すためにはどの色を混ぜればよいか何度も色を混ぜながら②工夫しながら書き進めていく。(写真1)

子ども達が創意工夫を凝らし、作品が出来上がった。子ども達の作品を見ていくと、赤、青、黄色、紫など彩豊かな作品に仕上がっており③1人1人の思いを巡らせた作品が出来上がった。(写真2)とても楽しかった。またお絵かきしたいと子どもたちは口々に話し合っている。



写真1「子ども達の活動中の様子」

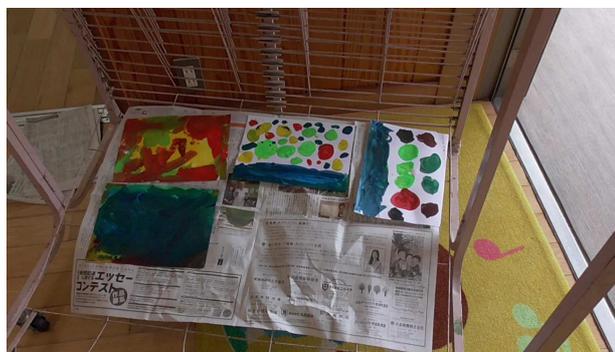


写真2「子ども達の出来上がった作品」

(1.2) 考察

下線部①では、絵を描く活動の中で友達と話し合いながら活動を進めている様子がある。友達とかかわる中で、お互いの思いや考えなどを共有し、絵を描き上げるという共通の目的の実現に向けて話し合いを進めている様子が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」につながる関わりであることが言える。

下線部②の、自分の思い通りの絵の具の色を出そうとする様子から、絵の具の色を出そうと工夫しながら諦めずにやり遂げようと活動を進めていることが理解できる。また友達との関わりの中で、お互いの思いや考えを共有し、絵を描き上げるという共通の目的の実現に向かう姿が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

下線部③では友達と話し合いを進め、絵が完成した様子から、絵を描き進めるために友達と話し合い、自分の力でやり遂げる過程を踏まえ、作品が出来上がった達成感を味わっていることが窺える。また完成した自分の作品を見ることによって自分の力で行えたことの達成感を味わっている様子が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

(2.1) 事例2「水の中にいるような気持ちになって」2018/6/25

事例2は、E県N市の幼稚園4歳児の保育活動の事例である。

これまでに水の中の生き物について絵本や図鑑、池の鯉を見ることで興味を持ちながら知ることができた。水の中の生き物はどんなものがあるか楽しく知ることが出来ている様子であった。「池の中の鯉は、水中からどのように見えているのだろうか?」という疑問から水の中の生き物について関心を持つことに繋がったようである。この保育では実際に水の中の空間をイメージしたものである。スズランテープで飾り付けをして大型積み木で環境を構成している。海や川の生き物になりきるためのものである。(写真3)



写真3「水の中の空間をイメージした環境構成」



写真4「お友達と協力し、活動を進める様子」

子どもたちは、「テープがサラサラといっている。」とスズランテープの触れ合う音を感じている。「この前行った川や海の波のようだね」

と保育士も答える。まるで水の中で遊んでいるような気持ちになって遊べるように促す。

保育者は、パソコンを使い前回の活動中に録音した音を子どもたちが聞く。川には様々な音がある。①川の流れる音、何かが落ちる音、お友達の話し声などがあり、これらについて周囲のお友達と話し合った。

「では水の中の生き物の気持ちになって遊んでみよう。」と声かけがある。活動中も「池の鯉を見たけれども池の鯉はどのように見えているのかな?」と子どもに興味を引きながら疑問を与える。活動中カラーボールがたくさん投げられた。ボールを口で咥え、池の中の鯉になりきる幼児もいた。

4歳児A君は大型積み木を使い何かを作る。「何をつくっているの?」とB君。「おさかなの家を作っているんだよ。」と作業をしながら答えるA君。「じゃあ一緒に作るのを手伝うよ。」とD君。色んな形の積み木を集めながら、組み立てていく。「この積み木は、ここに置くんや」とD君。「いや、この積み木はここに置く。」とA君。積み木をどこに置くかでいざこざが起きたが、②製作者のA君の意見が通りA君の指示した場所に置かれることとなった。(写真4)その後、③仲間が加わり協力し活動が進められていた。(写真4)

(2.2) 考察

下線部①の、前回の活動について話し合う様子から、友達や保育者との関りの中でお互いの思いや考えなどを共有している姿が窺える。また、幼稚園外である川での活動でお友達と関わりながら自然現象について情報を伝え合い活動中に情報を取り入れている様子が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「協同性」、「社会生活」との関わりにつながる関わりであることが言える。

下線部②の、A君とD君のいざこざを通して話し合い、結果製作者であるA君の思い通りの場所に積み木が置かれる様子から、相手の立場に立って行動し折り合いを付けていることが理解できる。また、話し合いの上で積み木の製作者であるA君の指示が通ったことから、この積み木の制作者はA君であるというきまりの必要性がわかり、自分の気持ちを調整する様子が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「道徳・規範意識の芽生え」につながる関わりであることが言える。

下線部③の、積み木遊びにおいて仲間が加わり活動が進められる様子から、魚の家を作るという共通の目的の実現のために、友達と協力して活動を進めている。また相手の気持ちを思いやりながら折り合いを付ける様子が窺える。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「協同性」につながる関わりであることが言える。

(3.1) 事例3「オリジナル絵本の表紙を作る」2019/6/11

事例3は、E県N市の幼稚園4歳児の保育活動の事例である。

これまでに、様々な活動を通してオリジナルの絵本を作る活動が展開されていた。この活動では、オリジナルの絵本の作成にあたり、その絵本の表紙を作る活動が展開されていた。



写真5「D君が活動中テープを貼る様子」

芸術士が前回の振り返りを行い「では、オリジナル絵本の表紙を作ってみましょう。」と声がかかる。子ども達は配られた画用紙に用意された色マジックで絵描き、色テープ、色付きのシールなどで飾り付けを進めていく。



写真6「D君とA君の作品」

4歳児D君は絵本の表紙に色テープを貼る活動を展開していた。①様子を見ると、色テープを真っ直ぐキレイに貼ることが出来ずに剥がしては貼り、剥がしては貼りを何度も繰り返していた。何度も繰り返す内に、テープの両端を引っ張りながらテープを貼ることで真っ直ぐキレイに貼ることが出来ることに気付く。(写真5)

次に、自分の思い通りの長さのテープを切り取ることが出来ないことに気付く。これも何度も切っては貼りを繰り返す。テープを出し、貼る画用紙の両端の長さを比べながら測ることで自分の思い通りの長さに切り取ることが出来た。

②これらを繰り返し、5本のテープの飾りが出来上がった。(写真5)「先生、見てみて。こんな出来たよ。」とD君は保育者に作品を見せに向かう様子があった。

③その活動の一部始終を見ていたA君も同じようにテープを切り貼りする活動を展開していた。(写真6)

(3.2) 考察

下線部①の、色テープを何度も貼りなおす様子からテープを貼る活動に対して試行錯誤を重ね、諦めずに挑戦していることが窺える。また、テープを歪みなくきれいに貼るためにはどうすればいいのかを自分の力で考え、工夫する姿がある。本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」につながる関わりであることが言える。

下線部②の、D君の作品が出来上がった様子は、試行錯誤を重ね5本のテープの飾りが出来上がったことが窺える。テープを上手に扱うために自分の力で行うために考えたり、工夫したり、諦めずにやり遂げることを経験している。また出来上がった作品を保育者に見せに行く姿から、保育者と出来上がった達成感を共有する姿が示唆される。以上の本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」につながる関わりであることが言える。

下線部③の、A君がD君の活動の様子を観察しながら、自身も同じようにテープを貼る活動を展開している。またA君はD君とかかわる中で、A君はD君をモデルにしながらテープを上手に貼るために自分の力で考え、工夫する姿が窺える。またA君の様子からD君の活動の良さを積極的に活動中に取り入れ、一緒に活動する楽しさを味わっている。本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

(4.1) 事例4「大きな模造紙を使って」2019/6/18

事例4は、E県N市の幼稚園3歳児の保育活動の事例である。

ホールに集まると縦5メートル、横1メートルほどの模造紙が敷かれていた。その横には様々な色の絵の具や円柱状の木、ビニール紐の束などが用意されている。子ども達も興味津々な様子である。

「今日は、この模造紙に絵の具やマジックを使ってお絵かきをしたいと思います。」と保育者の声掛けがある。子どもたちのワクワクとした表情が見られる。

「では、マジックを使って自由にお絵かきをしましょう。」と声がかかる。たくさんあるマジックの中のどのマジックにするか選ぶ様子があった。①油性マジックで「横に塗る書き方もあるよ。」「丸を描く」「お友達の顔を描く」と友達や保育者と話し合う。(写真7)マジックを使いながら色の違い、持ち方、使い方にも気づいているようであった。

保育者がビニール紐の束になったものを取り出した。「これを皆で解いてみよう。」と声かけがある。②ビニール紐を解くのは意外と難しく、絡み合っている紐をどのように解けば良いのか先生や友達と協力し合いながら活動を進める様子があった。(写真8)

絵の具を使った活動では、先ほど解いたビニール紐に絵の具を付けて活動をしたり、手足を使い活動を展開していた。手の平にたくさんの絵の具を付けてキレイな手形のスタンプを残すにはどのようにすれば良いのか③何度も何度も繰り返し試している様子である。手に付ける絵の具の量を工夫し、掌にくまなく絵の具を塗ることが大切であることに気付いた様子である。

(写真9)



写真7「お友達や保育者と話し合いながら活動を進める様子」



写真8「お友達や保育者と共にビニール紐を解く様子」



写真9「手形スタンプを押す様子」

(4.2) 考察

下線部①のマジックでお絵かきを進める様子から、マジックをどのように使えば良いか話し合いながら活動に取り組んでいる姿がある。友達や保育者との関りの中から、マジックの色の違いやマジックの持ち方、塗り方の違いにも気づき参考にしながら思いや考えを共有する様子が窺える。また、マジックで自分の思い通りに絵描くためにはどうすれば良いのか自分の力で行うために考え、工夫する姿が窺える。本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

下線部②のビニール紐を解く様子から、友達とビニール紐を解くという目的を見だし、どうすればビニール紐を解くことが出来るのかを自身で考え、工夫している姿が窺える。また友達や保育者とどのようにすればビニール紐を解くことが出来るのかについて共に考え、協力する姿も見受けられる。本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

下線部③の手形スタンプを上手に押すために何度も手形を押す様子から、手形を上手に押すためにどうすれば良いか考え、工夫している。また、上手に手形を押すために何度も挑戦することで、手形を上手に押すという目的の実現に向け、諦めずにやり遂げようとする様子が窺える。本事例から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「自立心」、「協同性」につながる関わりであることが言える。

4. まとめと今後の課題

(1) 本研究のまとめ

本研究では、子ども同士の間関係の形成のあり方やそれを促す保育を分析するため、E県N市の私立幼稚園で行われている3歳児、4歳児、5歳児の芸術活動を分析した。その結果、『幼稚園教育要領』で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）が達成される有用な教育活動であることが示唆された。以下では、E県N市の私立幼稚園で行われた芸術活動から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）がどのように達成されたのか、主な項目を挙げてまとめる。

① 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」）

事例3 下線部①の、色テープを何度も貼りなおす様子からテープを貼る活動に対して試行錯誤

を重ね、諦めずに挑戦していることが窺える。また、テープを歪みなくきれいに貼るためにはどうすればいいのかを自分の力で考え、工夫する姿がある。本事例から幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿における自立心につながる関わりであることが言える。

②「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「協同性」）

事例1 下線部①では、絵を描く活動の中で友達と話し合いながら活動を進めている様子がある。友達とかかわる中で、お互いの思いや考えなどを共有し、絵を描き上げるという共通の目的の実現に向けて話し合いを進めている様子が窺える。以上の本事例から幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿における協同性につながる関わりであることが言える。

③「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「道徳性・規範意識の芽生え」）

事例2 下線部②の、A君とD君のいざこざを通して話し合い、結果製作者であるA君の思い通りの場所に積み木が置かれる様子から、相手の立場に立って行動し折り合いを付けていることが理解できる。また、話し合いの上で積木の製作者であるA君の指示が通ったことから、この積み木の制作者はA君であるというきまりの必要性がわかり、自分の気持ちを調整する様子が窺える。以上の本事例から幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿における道徳・規範意識の芽生えにつながる関わりであることが言える。

④「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「社会生活との関わり」）

事例2 下線部①の、前回の活動について話し合う様子から、友達や保育者との関りの中でお互いの思いや考えなどを共有している姿が窺える。また、幼稚園外である川での活動でお友達と関わりながら自然現象について情報を伝え合い活動中に情報を取り入れている様子が窺える。以上の本事例から幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿における協同性、社会生活との関わりにつながる関わりであることが言える。

(2) 今後の課題

本研究では、E県N市の私立幼稚園で行われている芸術活動が『幼稚園教育要領』で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」における「人間関係」に関連する内容（「自立心」、「協同性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」）が達成される有用な教育活動であることが示唆された。しかしながら、本研究で取り上げた子どもの姿から、「人間関係」以外にも、他の姿を育むことも効果的であると考えられる活動内容も多々見られた。今後の研究

では、E 県N市の私立幼稚園で行われている芸術活動が他の姿を達成させるためにも有用な教育活動であるという視点でも分析し、それらを示す必要があると考えられる。これによって、E 県N市の私立幼稚園で行われている芸術活動がさらなる教育的な意義を見出すことを課題とし、研究を進めていく。

また本研究で調査調査としたE 県N市の私立幼稚園は常に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を実践の中で意識し、普段の保育中に取り入れている。だからこそ、今回の活動分析によって多々見受けられたのではないかと考えられる。日頃の教育・保育に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を意識的に結び付けていない場合は、こうした結果とは異なる可能性もあろう。調査時点で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」がどこまで意識されているかを踏まえた分析が今後の課題となろう。

引用文献

- 1) 田中 敏明・屏賀 一男・井出 裕子・高木 富士男 (2018) 保育雑誌に掲載される年間指導計画の分析-改訂された幼稚園教育要領に示された「資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から-
- 2) 湯地 宏樹 (2019) 改訂幼稚園教育要領等に対応した授業改善の試みと学生による授業評価
- 3) 青山 佳代 (2018) 保育者養成における保育内容指導法に関する一考察-「環境」と「人間関係」に注目して-
- 4) James J. Heckman (2015) 幼児教育の経済学. (古草秀子訳). 東洋経済新報社. (James J. Heckman. (2013) Giving Kids a Fair Chance. MIT Press)